

講座⑨ 百舌鳥・古市古墳群のなぜ？を考える 世界遺産講座 2025

| | |
|---|---|
| 第1講義 | なぜ、こんなに大きいのか？前方後円墳なのか？-大きさと形の意味を考える- |
| <p>人の力で土を運び、積み上げて築いた巨大な古墳は、1,600年もの時を経て、現代のまちの中でも大きな存在であり続けています。今は深い木々に覆われた小山のように見える前方後円墳は、造られた当時には正確な円と直線で描かれた人工的な造形を誇示していました。なぜ、これほど大きく造る必要があったのか？なぜ前方後円の形に造るのか？いまだに、だれもが納得する回答が得られているとは言えない大きな謎です。あらためて、前方後円墳の大きさと形を見直し、その意味を考えます。</p> | |

| | |
|--|--|
| 第2講義 | 何が埋まっているのか？-富雄丸山・ウワナベ古墳にみる古墳発掘の方法と発見- |
| <p>今から約1600年ほど前に、日本全国で造られた古墳は、埴輪や葺石など、ある程度の共通性があります。しかし、長年の時を経て、崩れたり土に埋もれてしまった古墳は、発掘調査によって当時の姿を考察することができるようになります。本講義では、どのように古墳を発掘調査するのか、そして何がどのようにわかるのかを、実際の調査事例をもとに解説します。</p> | |

| | |
|---|--|
| 第3講義 | なぜ、木々が生い茂っているのか？-古墳の景観の移り変わりをさぐる- |
| <p>これが古墳…？樹木がびっしりと生えた小さな丘にしか見えない、古墳を見た方からよく伺う感想です。このような景観は、いつから見られるようになったのでしょうか。古墳が作られたころから、それとも…？古墳の景観は、実は時代とともに移り変わってきました。本講義では、古墳墳丘や周濠の堆積物、古絵図、古写真などをもとに、その実態に迫ってみたいと思います。</p> | |

| | |
|---|---|
| 第4講義 | 陵墓古墳はどのような歴史をたどったのか？-祭祀と管理、考証と治定、そして人々との関わり- |
| <p>陵墓は時間がたつにつれて被葬者が忘れ去られてしまいます。ようやく江戸時代には、多くの国学者が天皇陵の探究を行い、さらには天皇陵を整備していく動きが強まります。幕府はたびたび天皇陵の調査や修陵事業を行いましたし、幕末には宇都宮藩の主導のもとで「文久の修陵」が実施され、陵墓の基本形が定まりました。こうした流れをたどりつつ、今の私たちが見る陵墓の景観がどのようにしてできたのかを探ってみましょう。</p> | |

| | |
|--|---|
| 第5講義 | なぜ古市・百舌鳥の地に巨大古墳群が造られたのか？-地形と古代王権から考える- |
| <p>まず、古市古墳群と百舌鳥古墳群について、地形や立地などから、そこがどんな地であったのかを考えます。そのうえで、倭の五王の古墳を考え、古墳時代中期の王権において、両古墳群がどのように位置づけられるかについて考えます。</p> | |

| | |
|--|---------------------------------|
| 第6講義 | なぜ埴輪を立てたのか？-ヤマト王権と埴輪づくり- |
| <p>埴輪の採用は古墳時代の開始とともに始まり、古墳時代の終焉とともに終わりを迎えました。このように、古墳と密接な関係をもって展開した埴輪ですが、誰が・なぜ・どのように必要としたのでしょうか。本講義では、埴輪の造形や意味の変遷を検討することで、埴輪づくりから古墳祭祀の変貌やヤマト王権の発達過程について考えます。</p> | |